勇気ある一言のために

甲州市立勝沼中学校二年　野呂瀬　巴都

夏休み前、僕は社会の授業で「人権を考える」ことをテーマに授業を受けた。まず、「人権って何。」ということで、自分の考えをまとめた。漠然と「人が自由に生きるための権利」とノートに記した。その後、友達の意見を聞いたり、先生の話や授業の中で、「人権とは、人がより良く生きるために日本国憲法で保障されているもの」だと学んだ。しかし、僕には具体的なイメージが沸かず、もっとわかりやすい表現はないものかと思い、調べてみることにした。

そこで、作家の落合恵子さんによる人権啓発ビデオに出会うことができた。落合さんは、普段、作家として、いつも書くことのテーマにあるのは「人権」だそうだ。落合さんは、人権とは、誰の足も踏まないこと、同時に、人権とは、誰にも自分の足を踏ませないこと。その約束と実行の上に花開くものだと言う。生活の中にとにかく溶け込ませること、それが人権というもので、そして、誰もが、どんな状況でも、等しく持っている人間としての権利であると言う。この場合の足とは、具体的な足ではなく、その人自身、あるいは、その人の尊厳という風に言葉を変えることも可能かもしれないと言っている。とてもわかりやすい表現だ。

そこで僕は、今まで一度も誰の足を踏んだことはなかったか、踏まれたことはなかったか考えてみることにした。考えてみたけれど思い当たることがなく、もしかして、これも人権かなと思い考えてみた。僕は、サッカーのクラブチームに入っている。ある日を境に、練習に来なくなってしまった仲間がいた。その仲間は、僕と同じ保育園に通い、サッカーではポジションも同じセンターバックで、僕の相棒でもある。小、中学校は別である。練習に来なくなってしまったのは、思い当たる出来事がある。サッカーの練習中、仲間にファールを何度もされ、我慢できなくなり、ケンカになってしまったのだ。僕の相棒は、保育園の頃から、少し気持ちが荒い性格だった。なので、周りの人からは、少し距離を置かれるような存在だったのかもしれない。でも、とても優しいいい奴でもある。ケンカから数日経ち、練習に来ない相棒のことが心配になり、その日のことを母に話してみた。母との話の中で、相棒の母は、重い病気であることを知った。僕は、とても心配になった。と同時に、夜の練習でも自転車で来る相棒を尊敬した。きっとみんなそんなことも知らず、相棒の良いところも認

めず、ケンカになってしまったのだろう。僕はこの時のことを、被害者なのか、加害者なのか、足を踏んでしまっていないか考えてみた。僕にとっては、相棒がいないと試合の時困るし、ケンカという嫌な場面にそう遇したし、被害者意識が強い。しかし、それ以上に加害者だったかもしれないという思いも強くある。なぜ僕はあの時言ってあげられなかったのだろうか。相棒の普段の性格から、相棒がファールをしてケンカを売ったと、みんなに誤解されていたのに、「違うんだよ。」とその一言をみんなに伝えることができなかったことが悔やまれる。そして、相棒にも声を掛けてあげられなかったことが悔やまれる。僕が一言発言していたら、その場の雰囲気も戻せただろうし、相棒も嫌な思いをせず、自分の荒っぽい行動にも気づけて、お互い良い気持ちになれたと思うと、一言を言えなかった僕は、知らずに足を踏んでしまったかもしれない。みんなで相棒のことを思い込みで差別をしていたのだ。僕は、本当は、「君が必要なんだ。そして、甘えずに自転車で来ていてすごいね。」と自分の気持ちを伝えたい。でも、恥ずかしくて言えなかったので、試合の前日、「明日の試合、絶対負けたくないから来てよ。」とだけ伝えた。他の仲間も何か声を掛けたかもしれないが、相棒が試合に来てくれて僕は嬉しかった。相棒の気持ちを考えると、ケンカをしてしまってみんなに会いたくなかっただろうが、誰か一人でも声を掛けてくれて嬉しい気持ちもあったと思う。それが僕の一言だったとしたら、僕は、本当に嬉しい。勇気を出して来てくれた相棒を尊敬する。

今回、人権について考え、まず僕にできることを考えた。僕に足りないところでもあるが、それは、おかしいと思ったことは、おかしいと言える勇気をもつことである。自分の一言が、今回のように、一人でも助け、救えることができたのであれば、自分の存在が認められ、人権が守られているように思える。また、同時に、相手も、自分の存在を認められ、尊厳を守ることができるのではないかと思う。僕達一人一人の軽い気持ちや思い込みが差別を生んでしまうのであれば、この一人一人が、差別をなくすことができるとも言える。そして、なくしていかなければいけない。僕は、この作文を機に、勇気ある行動と勇気ある一言に磨きをかける努力をしていきたい。